

2018 年度全国生協連グループ 社会福祉事業等助成事業

認知症介護指導者と市区町村行政との連携体制構築事業
報告書

社会福祉法人浴風会
認知症介護研究・研修東京センター

令和元年 12 月

はじめに

これまでに 2500 名を超える認知症介護指導者が養成され、全国で様々な形で認知症介護の質向上に寄与しているほか、認知症の人が住み慣れた町でその人らしく暮らし続けられるような、認知症の人とともに暮らすまちづくりにも多大なる貢献をしている。その実践事例は幅広いが、十分収集し、共有することができていない。事例を収集し公表することによって、地域における認知症の人とともに暮らすまちづくりの活用に大きく寄与することができるだろう。

その前提として、認知症介護指導者は、市区町村において十分認知された存在であるとはいいがたい。市区町村の認知症施策に貢献しようと窓口を訪問するが門前払いされてしまったり、多くの課をたらいまわしにされたということも聞かれる。認知症介護指導者と行政担当者が適切に出会うことによって、地域の専門職、地域包括支援センターその他の専門機関や社協、その他の地域における様々なネットワークと太くつながることができれば、地域に両循環が生まれてくることが期待できる。

本研究の成果が広く、市区町村において活用されることを期待したい。

目次

はじめに	i
目次	ii
1. 研究の目的	1
2. 調査方法	2
3. 調査結果	3
4. 考察	8
参考資料	9
執筆者一覧	23

1. 研究の目的

認知症介護指導者（以下、指導者）は、国の認知症施策である認知症施策大綱においても養成の目標値が掲げられており、認知症施策の展開に貢献している立場である。具体的には、都道府県・指定都市の単位で実施される認知症介護実践者研修（以下、実践者研修）や、認知症介護実践リーダー研修（以下、リーダー研修）の講師役割を主な役割としている。指導者の養成を担っているのは、仙台・東京・大府の3か所にある、認知症介護研究・研修センターである。3センターでは、2000年の制度創設から現在に至るまでに2,500人を超える認知症介護指導者を養成した。研修を修了した指導者は、県単位で認知症ケアの講師を担っているほか、状況である。

指導者は、都道府県・指定都市による養成という構造上、県の認知症施策担当者とは密な連携を図り、研修以外の県の認知症施策への貢献につながっているケースが多い。一方、市区町村行政と連携し活動を展開しているケースは、これと比較すると少数にとどまっており、指導者が認知されておらず、行政の認知症施策の担当課等に指導者が出向いても、連携体制が構築できていないといった状況も生まれている。

認知症介護のエキスパートであり、人材育成を担っている指導者が、市区町村との連携によってより地域に対して貢献をしたいという意欲を持っているにも関わらず、それがかなわないという状況は、認知症の人とともに暮らすまちづくりを進める観点からは、大きな損失と言える。

そこで、本事業では、指導者に情報公表の可否を伺い、許可の得られた指導者の情報を情報を公表することにより、都道府県・指定都市が、市区町村に対して、認知症介護指導者の情報を提供しやすくし、市区町村がどのように指導者と連携を取ればよいか検討ができる対背うを作ることにした。具体的には、認知症介護指導者に関する情報のアクセシビリティを高めるWEBページを認知症介護研究・研修センター（仙台・東京・大府）のホームページであるDCnet上に構築し、もって市区町村行政担当者と認知症介護指導者の連携体制を構築・推進することを目指した。

2. 調査の方法

1) 対象

調査実施までに、認知症介護研究・研修センター（仙台・東京・大府）を修了した認知症介護指導者の内、連絡先を把握できている指導者 2,364 名（仙台 698 名 大府 769 名、東京 897 名）を対象とした。

2) 調査方法

(1) 調査方法

自記式の質問紙法で行った。FAX による返信と、WEB 回答の 2 種類の方法で情報を収集することとした。調査結果を踏まえて、有料実践事例と判断された事例については、より詳細なヒアリングを実施し、DCnet 上で公表することとした。

(2) 質問項目

質問項目は、①氏名、②氏名フリガナ、③認知症介護指導者として登録している都道府県・指定都市名、④所属施設、⑤事業所のある区市町村名、⑥所属施設・事業所名、⑦指導者研修の修了期、⑧コメント（研修の担当科目や取り組んでいる活動など）とした。

質問項目の①氏名、②氏名フリガナ、③認知症介護指導者として登録している都道府県・指定都市名は、必須項目とし、それ以外の項目は、選択項目とした。⑥所属施設・事業所名を公表する場合には、当該施設・事業所の管理者の承諾を得るよう指導者に促した。

(3) 調査期間

令和元年 11 月 26 日～12 月 4 日とした。

(4) 倫理的配慮

調査協力は任意としたほか、途中同意取り消しも可とし、それらの事態に及んだ場合も指導者に不利益はないことを明示した。また、収集した情報の目的外使用の禁止について説明したほか、都道府県行政を通じ市区町村行政に対し、得られた情報が提供される可能性があることを明示した。また、調査協力の同意は、当該調査の回答を持って帰ることを明示した。施設名の公表に際しては、当該施設管理者の同意を得たうえで判断するよう文書にて回答者に促した。

3. 調査結果

1) 回答数

期間中、仙台修了指導者 173 名、東京修了指導者 231 名、大府修了指導者 114 名から回答を得ることができた。それぞれ回収率は仙台 24.8%、東京 25.8%、大府 14.8%であった。全体の回収率は、22.9%であった（表 1）。

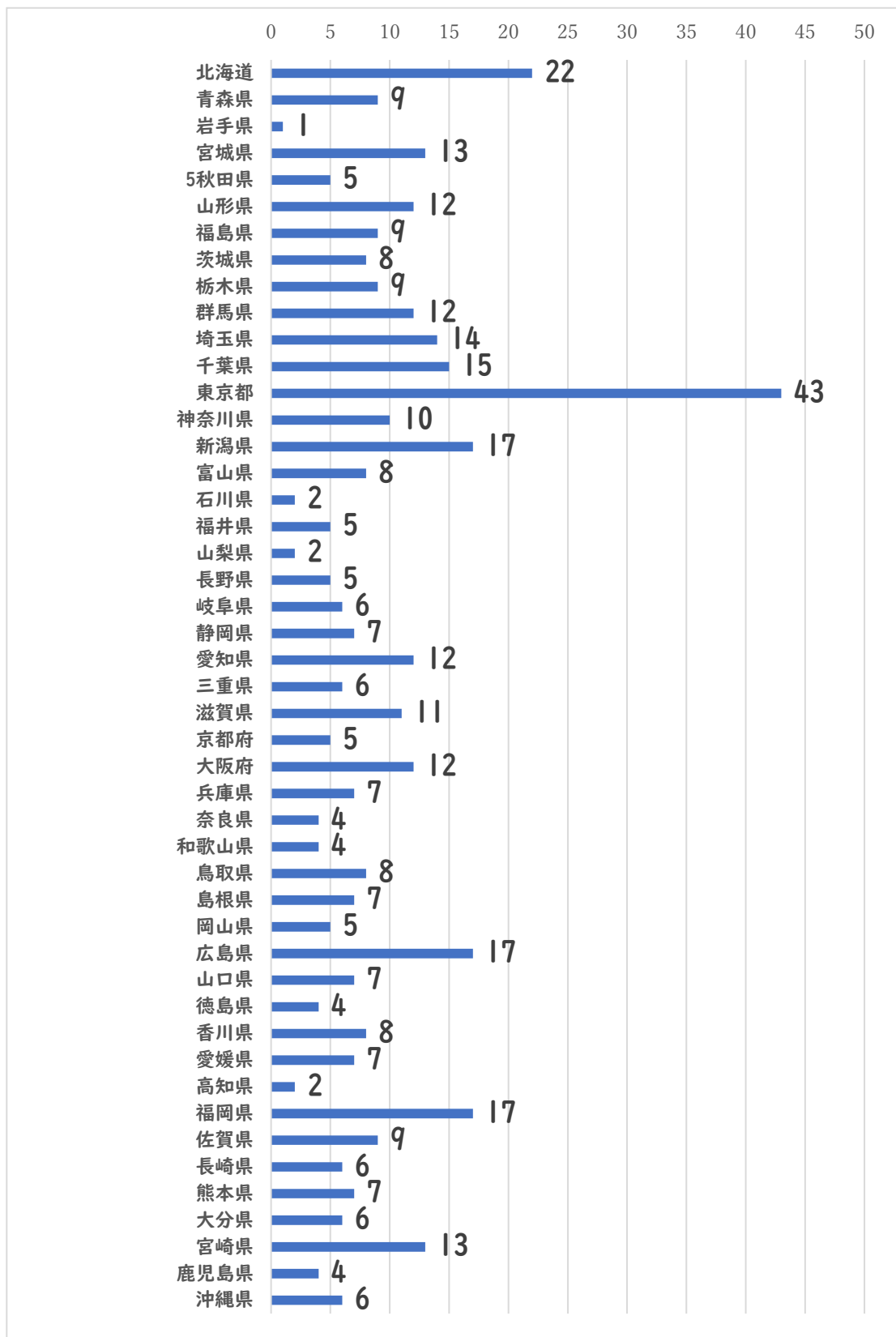
表 1 調査票の回収率等

	回答者数	配布数	回収率
仙台	173	698	24.8
東京	231	897	25.8
大府	137	769	17.8
合計	518	2364	21.9

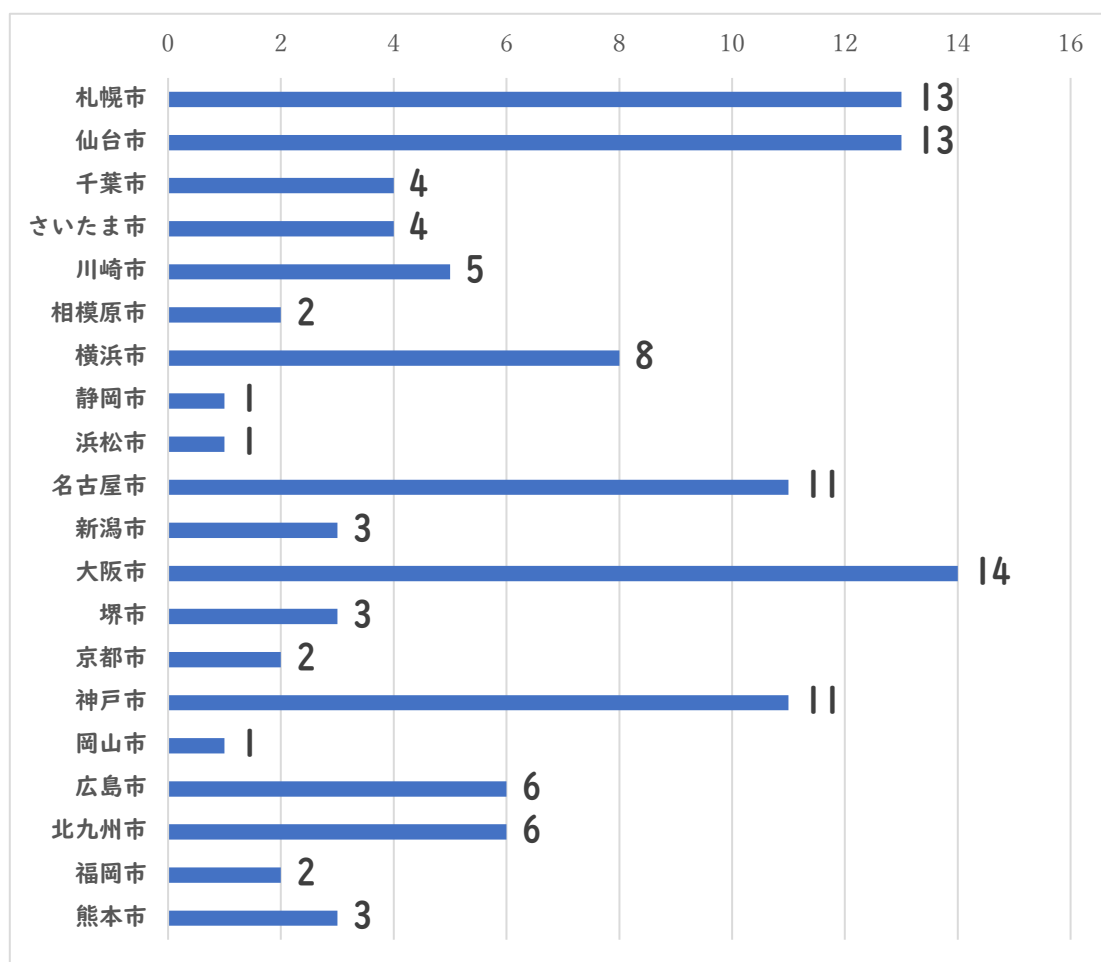
2) 回答結果

(1) 県別公表者数

県別の公表者数は、以下のグラフの通りであった。最も公表者が多い都道県は、東京都であり、次いで、北海道、さらに新潟県、広島県、福岡県と続いた。公表者が全く稲宿道府県、指定都市はなかった。



グラフ1 県別公表者数



グラフ2 政令市の公表者数

(2) 市区町村名、施設・事業所名、修了期の公表者数

市区町村名の公表者数は、507 名（97.3%）であり、施設事業所名の公表者は、477 名（88.2%）、修了期は 517 名（95.6%）と 85%以上の者が各自の情報公表した。

表2 市区町村名、施設事業所名、修了期の公表

	公表する		公表しない	
	人数	%	人数	%
市区町村名	507	93.7	34	6.3
施設・事業所名	477	88.2	64	11.8
修了期	517	95.6	24	4.4

(3) コメント記入者数

コメント記入者数は、232 名（42.9%）であった。

表 3 コメント記載者数

	記載有		記載なし	
	人数	%	人数	%
コメント	232	42.9	309	57.1

3) 実践事例の抽出と情報収集

以上を受けて、6 名の認知症介護指導者の実践事例を詳細に聞き取り、実践事例について取りまとめ、紹介した。実践事例の概要は下表の通りである。参考として、巻末資料に坂本雅子氏、田邊恒一氏の事例を紹介する。

表 4 詳細を紹介した実践事例一覧

氏名	テーマ	主旨	所属
倉石知恵美	ロバ君倶楽部の取り組み	地域住民と指導者の取り組み例として	かないばら苑 桃の木停デイサービス
江藤渉	認知症施策を活用した指導者によるソーシャルワーク実践	認知症施策を有機的に組み合わせた地域での取り組み例として	シェアハウス百花
坂本雅子	小中学校における認知症啓発活動	指導者による小中学校での啓発活動例として	特別養護老人ホームサンシャインつくば
新野直紀	初期集中支援チームにおける取組	認知症介護指導者の初期集中支援チームにおける実践例として	グループホームちゅーりっぷ苑・さくら
田邊恒一	認知症の人と子どもたちが楽しく過ごすためには	子どもと認知症の人が共に過ごす実践例として	グループホーム谷津苑
鈴木裕太	楽しみながら行う地域連携	都市部の小規模多機能ホームでの地域住民、行政、病院との連携の過程の紹介	東五反田倶楽部

4) WEB ページの制作と都道府県・指定都市への連絡

以上の結果を踏まえ、具体的な回答結果について、DCnet 上に公表した。公表した内容については、都道府県・指定都市の行政担当者宛てにメールで連絡した。

4. 考察

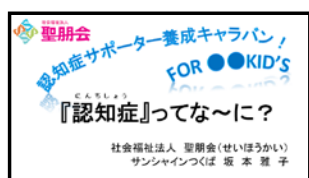
1) 指導者情報公表について

取り組みの結果、518名の認知症介護指導者の情報を公表し、都道府県行政を通じて周知することができた。これによって、認知症介護指導者が市区町村において活動を広げるきっかけを作ることができたと言える。

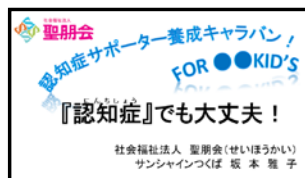
今後は、①情報を公表する指導者の拡大、②コメントのある指導者数の拡大を行っていききたい。年単位での更新を確実にしながら、情報公表の申し出があった指導者の情報更新を順次行っていくことによって、指導者自体に本事業の意義が浸透し、より登録数が増加するような両循環を生み出していきたい。そのためには、まず、より参照しやすいページ作りが必要である。今回500名を超える指導者の登録が得られた。これは、必要とする情報に簡単にたどり着くための検索機能等が仕組みが必要となる人数であると考えられる。そのため、ブロックや県別の検索機能をつけていきたい。

また、今回は、少ない情報の中からではあったが、地道な努力を積み重ねている地域での実践事例を詳細に聞き取ることができた。取組の経過や意義、工夫も含めた情報であり、指導者以外の実践家も参考になる内容となった。今後も優良実践事例を収集し、本リストに紐づけて公表することにより、より効果的に指導者の情報を普及することができるほか、認知症の人の地域共生や支援の事例として、専門職や地域住民等に参照されるよう周知と情報の充実を図っていききたい。指導者の所属先等は異動等を含め、変更が多く、リアルタイムでの情報更新も課題となる。迅速な対応ができるようシステム改修を含めた対応を検討し、実行していきたい。

取り組みの概要



から



へ

認知症カフェでのつぶやき「孫が認知症じゃないのって…。嫌なんだよね」から、な～に？で終わらない、大丈夫な町を子どもたちと作れるかもと考えた！

子どもの力は伝染する！ 教室から家庭へ・地域へ



私は、教職の経験を活かし、小中学校での外部講師（外部資源の活用）として社会科や家庭科、キャリア形成や職業選択、総合的な学習として授業をさせてもらってきた。平成28年からは地域包括支援センターと共同で市内のすべての小中学校で認知症サポーター研修を実施している。内容は学校や地域の実情に応じ変更しながら子どもたちが理解できるものにしている。「学校や地域の実情」というのは易いが、学校も地域も「統合」という名のもとに刻々と変化している。地域ってどこなのか…を自問自答しながら行っている中で出会った言葉が、認知症カフェでの「孫たちも学校で認知症の勉強してるんだね」「でも嫌なんだよね。すぐに認知症って言われて。悪化するばかりの怖い病気になってしまったようで、落ち込むわ」というつぶやき。認知症ってどんなものなのか、病気として伝えるだけではかえって落ち込む人すらいる。なんだかが少しわかっただけではちっとも変わらない。大丈夫にしなければと考え、今こそ子どもの力が活かせると直感した。

同時に、スタッフにも声をかけ、サンシャイン劇団を結成。事務、総務、管理栄養士、相談員、介護職員みんなでワイワイと場面を想定し観察し練習した。副次的成果として、職員の洞察力が高まったことはもちろんである。場面を劇団員の演技で見ることにより、子どもたちの考え方も広がり、深まっていくことも実感できた。落ち着くようにその場が安心するようという対応から、本当はどうしたいの、本当に不安なことを減らせなかったら安心できないという考え方をするようになってきた。また、この相手の本当の思い、言い出せない気持ちに気付こうとすることは、子ども同士のかかわりにも小さな一石を投じていると担任教諭から聞いた。枠にとらわれない子どもの発信力は、きっと大人にも届くと考えている。

地域の概要

茨城県かすみがうら市（118.77km²）

霞ヶ浦町と千代田町が合併し2005年誕生

- ・人口：41,768人
- ・65歳以上人口：12,710人（高齢化率30.4%）
- ・日常生活圏域：2
- ・地域包括支援センター：1か所
- ・認知症地域支援推進員：4人
- ・主要産業：農業（レンコン生産日本一）
- ・周囲三方を霞ヶ浦に囲まれ、一方は筑波山に連なる。土浦・つくば・かすみがうらサイクリングリゾートとしての再開発中
- ・若年人口の減少により、中学校、小学校の統合が進む
12/1現在 3中学校（1,055人）8小学校（2,024人）



- ・日常生活圏域は、旧市町村で2としているが、実際は3と考えられる。（旧町2とギュッと細くなっている神立駅周辺…その小学校2と中学校2で市内児童生徒数の54%）
- ・霞ヶ浦地区の小中学校統合は完了（中学校2→1へ）…PTA会長で統合委員会委員長でした（笑）。小学校も中学校から3年遅れで7校→2校へ
- ・2022年4月には4小学校と中学校1校が統合し小中一貫校（義務教育学校）となる準備が進められている。地域が現在進行形で変化しつつある。

法人・施設紹介



社会福祉法人 聖朋会（せいほうかい）

・1987年9月設立「地域に役立つことをとことん考え、行動し、私たちは地域の資源となります」を理念として活動中

・ロゴマークは、地域の人と支え合うこととその時々揺らぎにとことん付き添うことをイメージ（芸術学部大学生ととことん打合せをし作成）

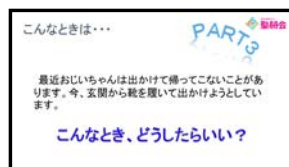
・実施事業：特養・ショートステイ・地域密着デイ・認知所
デイ・認知症カフェ・配食・支援センター・ケアプランセン
ター/保育園・子育て支援センター・子ども一時預かり・放課
後児童クラブ

・聖朋会の一員として、地域に役立つ取り組みと位置づけ小
中学校での学びの場（授業）に積極的に参画（管理栄養士、
運動指導士、男性保育士等含む）

- ・坂本だけが授業等に出ているのではなく、学校で必要とする社会人枠の授業には結局的に協力する。
- ・進路指導、職業選択の授業や男女共同参画の授業、等々 他に学校からの体験受け入れ時の説明等は誰でもできるように！がモットー。

活動紹介

- ・D小学校（H28～毎年実施・対象：5年生2単位時間90分の授業（総合的な学習の時間として実施）写真は2019.11月実施）



- ・ペアで考え、その理由も含めロールプレイで発表：
- ・田んぼを見に行きたいというおじいちゃんを心配した孫が「この前植えた庭の花を見に行こうよ」はよくない対応と。おじいちゃんは田んぼが見たい、稲の様子やお米の出来具合が心配だから見たいのに、庭の花を見ても心配は無くならない。だからよくない対応と考え、一緒に田んぼまでいけないのなら、わかりやすく伝えてごめんねって言い、いつならいけるかを伝えたほうがおじいちゃんは納得するんじゃないかな。と

- ・ 少人数のクラス、毎年5年生で授業をしていく中で、気づきや思考が深まっている。
- ・ 目の前のことだけに対応し、穏やかになることが大切から、それも大切だけど、本当はどうしたいんだろう。本当に心配なことややりたいことでないのに納得いかないかもしれない…等の意見が出るようになっていく。…おじいちゃんが田んぼが心配だから見に行きたいと外に行く理由を設定したペアは、「この前植えた庭の花を見に行こう」と行き先を変えようとした。自分で植えた花なのでそれでもいいかと最初は考えたが、更に考えてみると、それでは田んぼの心配は解決しないことに気付いたと発表。稲がお育っているか、水はちゃんとあるか等、これまでおじいちゃんがやってきたことから心配は出ているんだから、別のことをやっても気持ちはすっきりしないと思うと発言した。
- ・ 終わった後の感想では、認知症の理解から自分事の気持ちの理解につながり、言い出せない気持ちを考えて話したり、聞いたり、行動したりすることは誰にとっても大切との意見が出た。…すごい感動！！ 学校、先生方の、地域の人づくりに感激！！しています。

活動紹介

- ・ C小学校（H29～毎年実施・対象：6年生2単位時間90分の授業
（総合的な学習の時間として実施）写真は2019.12月実施）

授業計画（90分）		
時間	内容	授業内容
導入	10分	自己紹介と授業の目的説明
展開	20分	認知症の理解について学習
展開	40分	認知症の理解について学習
まとめ	10分	まとめと振り返り



- ・ ペアで考え、ロールプレイで発表：「夜中におばあちゃんが電気をつけて大きな音でテレビを見ている…」
- ・ 認知症で時間がよくわからないのかもしれないよ。今は夜の11時だよって伝えればどうだろう。
- ・ 時間が間違っておるだけじゃなくて、本当に耳が聞こえづらいのかもしれない。この頃どうかをみんなで確認しようよ。
- ・ いきなりテレビを消すことは絶対やめたほうがいい。何も言わずに消されたら誰だって腹が立つし、訳が分からないから…。



- ・ 子どもたちの考え方は回を重ねるごとに目の前の見えていることから、それはなぜ、自分だって同じ…と広がっていく。

- ・ 始めたころの授業（写真の学校以外も含む）では、認知症についての理解の内容から、『障害』の部分が強く印象に残り、記憶が保てなくなる、時間が分からなくなる、怖いというネガティブな後味になることも多かった。（そういう授業になってしまったと反省）
- ・ 今年の授業での発言等からは、認知症の理解をできないこと、怖いこととだけとらえるのではなく、だから…と前向きに（ポジティブに）とらえている印象があった。夜中であるという時間が分からないのは、電気をつけて明るいから。今は夜の11時だよと伝えれば、夜だとわかるのではないか。だったら、夜遅いということが分かるように伝えられればもう寝ようかとなるのかもしれない…というような発言があちこちで聞かれた。
- ・ また、認知症ということだけから考えるのではなく、本当に体調が悪いのかもしれない、耳が聞こえないのかもしれない、病院に行って治る者は治ったほうがいいのではないという声が聞こえ、一般的におばあちゃんなら…というような感じ方になってた。（認知症だけが特別なものではないという感覚も持てた。）

活動のきっかけや経緯

- 教育学部卒業後、小中学校教員11年の経験を活かし、毎年地域の小中学校等で福祉理解の授業を行う。（社会科として・家庭科として・総合学習としてetc）
- 地域の公民館や民間企業等からの依頼、法人事業で認知症サポーター養成研修を年に数回実施（H20年～）
- 夏休みの子どもの居場所として、職員に施設開放（H20年～）。夏休み宿題対策の自由研究で『怖い夢はなぜ忘れられないの？』『うちのおじいちゃんよく道に迷うのはどうして？』を支援→認知症の理解に繋ぐ
- 平成28年から地域包括支援センターと共に市内全小中学校で認知症サポーター研修を開始
- 平成29年6月かすみがうら市教育委員会教育委員就任。いじめ対策としても違いを認め合う教育に認知症になっても共に暮らせる地域づくりも役立つのではないかと提案。また、学校との連携もスムーズになった（職権濫用…？）。

取り組みに際しての工夫

- ・ 学習カリキュラムの一環として行うので、関連する科目や単元全体の位置づけを確認し、**単発の授業にならないよう**する。そのための担任教諭との打合せが必要であるので、教諭の時間が取れる時に学校を訪問。
- ・ **道徳の授業等での「他者理解」の内容とも関連**できるよう配慮する。
- ・ 小中学校共に規模が大きく異なるので、学級規模に応じた授業組み立てをする。また、学年・学級の実態に応じた変更も必須。
- ・ いかに子どもたちに「身近なこと」と感じてもらえるかを学区の特徴やロールプレイ（サンシャイン劇団）を活用。中学校では、教師に役割を演じてもらうことも多い。学校側もお任せ感が減少した。
- ・ **人数の少ない教室での授業は全員が発言、ロールプレイができるように、大規模校ではロールプレイ等が教室の人間関係に影響が及ばないように担任と調整が必要**となる。

	学級数	人数
A小学校	14	381
B小学校	10	256
C小学校	6	85
D小学校	6	97
E小学校	5	60
F小学校	4	34
G小学校	19	624
H小学校	15	487
小学校計		2024
I中学校	11	357
J中学校	5	136
K中学校	17	563
中学校計		1055

- ・ 中学校では学年一斉の授業になることがほとんどで、会場も教室ではなく、武道館や体育館などになることもある。系統性のある授業というよりはイベント的なものになってしまう。ほとんどが1年生での授業であるので、翌年2年生での職場体験につながる生徒も多少はいる。
- ・ イベントを生徒の立場になったときに、やり過ごす時間にしないために、学年の先生にロールプレイを協力してもらっている。外部のイベント講師によるイベント授業から少し身近な授業になる…かなと思っている。
- ・ 小学校では、サンシャイン劇団による演技は、臨場感を高めるのに役立っている。
- ・ 中学校では、考える時間のロールプレイや発表がその後の教室での人間関係（いじめ等）に影響が出ることも容易に考えられるので、慎重かつ楽しく授業ができるように、先生との関係づくり、打合せは必須。その年の学年の雰囲気などで、環境としてのかかわり考える内容メインから、記憶の仕組みメインなどに変更することもある。・・・会を重ねているので、一度小学校で参加している生徒が大半である。

取り組みの成果

- ・「わからないのはしょうがない。怒らない」「できないことは助けてあげよう」という理解から「本当はどう感じているんだろう。こんな言葉でいいのかな」「これはおじいちゃんが本当にやりたいことなの？」「本当はどうしたいの」という理解に変化してきている（活動紹介参照）
- ・子どもを通して、家庭でも話題になっていることがある。（学校からの情報、保育園・児童クラブからの情報）話題になることから先に進めることがたくさんあると考える。
- ・取り組み当初は、同じ場面でも「その一言、そのかわり」によってご本人の混乱がひどくなったり悪化したりする場面を導入・まとめて紙芝居やスライドショーで見てもらっていた。スタッフ有志とサンシャイン劇団を作り場面を見もらうことにより臨場感が出たため、その後の考えに深まりが出た。

副次的成果として一場面を演じるにあたり、スタッフがご本人の心の動きを理解するために丁寧な観察を行っている。また、子どもたちの発言から、現場スタッフの意識以上に真剣に考えていることに衝撃を受けている。もちろん演技力もup！

取り組みの課題や展望

- ・認知症カフェで一コマから

Aさん：小学生の孫も認知症のことよく知ってるんだよ。
学校の勉強にあるらしいよ。

Bさん：少し間違えると『認知症じゃないの？』って言われるんだよ。それが嫌なんだよね～』

ちょっとぼけたんじゃない…と言われるのは年をとれば誰にでもあることとでかわいげがあるけど、「認知症」って言われると重病で悪くなるばかりでもう駄目だと思ってしまう。…とBさん

生活障害が減らせれば、決して「駄目だ」ではなくなることを子どもたちも、高齢者も感じて、元気に認知症になれる町にしていきたいと思う。子どもたちは、ほんの少しずつ理解し始めているように感じる。子どもから大人へ、「大丈夫！」が伝染するように取り組みたい。

- ・授業の位置づけを明確にし、イベント・単発授業とならないように更なる連携をとり、法人の事業の中にもサポーターとしての子どもたちの活動の機会を作っていくことが出来たらいいと考えている。そこから地域の活動につなげることもできるのではないかな。

本報告の趣旨

- ・報告者である田邊恒一は、千葉県習志野市秋津地域にて施設内に保育所が併設している介護施設を運営している。
- ・子どもたちと認知症高齢者が一緒に楽しく過ごすことが、双方に良い影響を与えていることを日々の実践から強く感じているところである。
- ・本報告では、実際の生活の様子、保育所立ち上げの経緯、子どもと活動する際の留意点・工夫について説明する。

習志野市について

人口：173,810人
65歳以上人口：40,303人
高齢化率：23.2%
(令和元年10月現在)

面積：20,97km²

地理的特徴：千葉県の北西部に位置し、東京からほぼ30キロ圏内にある。文教住宅都市であり、東京のベッドタウンとして発展。

自慢：

習志野高校野球部・吹奏楽部

(春のセンバツ2019準優勝、美爆音)

谷津干潟

(ラムサール条約登録地、渡り鳥の飛来地)



習志野市HPより抜粋

習志野市について

日常生活圏域 : 5
 地域包括支援センター : 5
 認知症地域支援推進員 : 5 名

・市全体として、少子化・高齢化が進行する見込み。

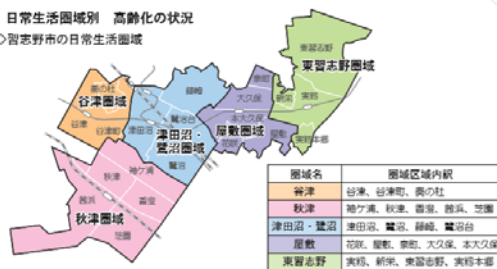
・総人口は減少傾向にあり、いずれの圏域でも前期高齢者人口の減少と後期高齢者人口の増加が見込まれることから、市全体で、介護や支援のニーズが増大することが見込まれる。

・とりわけ当事業所のある秋津圏域の高齢化が著しく、高齢化率としては2025年には低下傾向にあるものの、人口構造の偏りから、後期高齢者の占める比率が突出して高くなっている。

習志野市光輝く高齢者未来計画2018より抜粋

② 日常生活圏域別 高齢化の状況

◇習志野市の日常生活圏域



◇2025年の各日常生活圏域の高齢化の状況(推計)



事業所紹介

認知症対応型共同生活介護



グループホーム秋津

開設日 : 平成15年5月1日
 建物概要 : 木造2階建(民家改築)
 定員 : 9名(1ユニット)

わたしたちの理念

「楽しい」と感じることでできる暮らしを目指します。



グループホーム谷津苑

開設日 : 平成16年6月1日
 建物概要 : 鉄骨造2階建(社員寮改築)
 1階(デイ、保育所)
 2階(グループホーム)
 定員 : 9名(1ユニット)
 併設事業所 : 居宅介護支援事業所
 (ケアプラン秋津)
 訪問介護事業所
 (ウェルフェアヘルパーステーション)

事業所紹介

認知症対応型通所介護



デイサービスセンター
秋津



開設日 : 平成16年7月1日
定員 : 12名



認可小規模保育事業所



ロゼッタ保育園



開設日 : 平成22年3月1日
※令和元年10月1日認可へ移行
定員 : 18名



事業所紹介

認知症カフェ



袖団カフェ

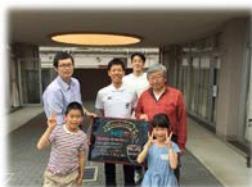
開催日 : 毎月第3日曜日

おやこカフェ



袖団おやこカフェ

開催日 : 不定期開催





なぜ保育所をしようと考えたのか

- 保育ルームの設置は当初、「職員確保」が目的。介護業界全体が職員確保に苦戦している中、「介護の仕事に興味があるけれど、子どもがいるから働けない。」との声を聞き、子どもを預かる場所があれば、潜在的な介護人材を確保することができるのではと考え、事業所内保育所の開設に踏み切った。保育ルームを設置したことで子どもを抱えながらも働きたいという女性のニーズに対応できるようになった
- 認知症の高齢者と子どもが日々関わることで双方に良い影響が出るのではないかと考えた。



子どもと活動する際の留意点・工夫

- 子どもたちと認知症の人がコミュニケーションを図ることで一緒に楽しく過ごせるようスタッフが配慮することが大切。そのためにはスタッフが認知症や高齢者の特性を理解しておくことが重要と考え、全スタッフに認知症サポーター養成講座を受講させている。
- 活動する際には、感染症等がまん延しないよう事前に健康チェックをする等、子どもたちと高齢者の体調に留意することが大切。
- 子どもとの活動がスタッフ側の押しつけにならぬよう、スタッフも一緒に楽しむという姿勢が大事。



成果

- ・ 認知症高齢者が子どもたちと関わることで、日々の生活での笑顔が増えたように感じる。認知症が進行しても「子どもが愛しい、可愛い。」という感情は残っており、そのことが認知症になっても楽しい生活を送るための要因のひとつであることが改めて理解できた。
- ・ 生活の中で高齢者と関わる機会が少ない子どもたちにとっても、保育所での高齢者との関わりは貴重な機会である。

展望

- ・ 介護、保育スタッフがお互いの活動を理解しあうことで、子どもと高齢者がもっと自然なかかわりができるような場所作りをしていきたい。
- ・ この取り組みを事業所内のみならず地域へと広げていきたい。その上でも行政や地域の人たちとの連携を深めていきたいと考える。



研究担当者

佐藤信人	認知症介護研究・研修東京センター
中村考一 *	認知症介護研究・研修東京センター
滝口優子	認知症介護研究・研修東京センター
橋本萌子	認知症介護研究・研修東京センター

* 執筆担当者

報告書名

2018 年度全国生協連グループ 社会福祉事業等助成事業
認知症介護指導者と市区町村行政との連携体制構築事業
報告書

発行元

社会福祉法人 浴風会
認知症介護研究・研修東京センター
〒168-0071
東京都杉並区高井戸西1-12-1
TEL:03-3334-2173 FAX : 03-3334-2156

発行年月

令和元（2019）年 12 月